

IV-344 考古学的見地から見た北海道主要道路網発生に関する研究

北海学園大学 学生会員 東 本 靖 史
 北海学園大学 フェロー 五十嵐日出夫

1. はじめに

北海道の歴史を振り返ってみると北海道各地の遺跡や文化系統がある程度わかるのは、今から約2万数年前ころの後期旧石器時代に入ってからであり千歳市祝梅の三角山遺跡や河東郡上士幌町の嶋木遺跡などでみられる黒曜石の剥片からできたナイフ形石器や、斧状石器で代表される文化である。

これらの石器は道内各地の遺跡で発掘されているが、場所によっては数百kmも離れた産地の石を使用している例もある。また今から約1万年前になると、土器の使用が始まり各地で多種多様な形式の土器が発生し文化や流行として全道に流れ出た。

このようなことから先史の時代から広い範囲にわたる物資や文化の交流があったと推定でき道路網らしきものが存在したのではと考えられる。

2. 本研究の概要

古代宮都の遺跡より現代に至る政庁の所在地点に関する歴史地理学的研究によって五十嵐日出夫が提唱した「土木施設等の構造は変わっても機能は変わらない」という『歴史的慣性の法則』を先史時代まで敷衍して、北海道における主要道路網配置と先史時代の遺跡分布との関係について考察した。

3. 北海道の主要都市と包蔵地数の比較

現在、北海道には32の市がありその中で人口10万人以上の市は10都市ある。ここではそれらの都市を主要都市と定義し、住居跡や貝塚などの遺跡や土器や石器などの遺物が埋蔵されている土地の数、すなわち包蔵地数と主要都市の人口・面積とを対比してみる（表1）。

表1より現在の主要都市は包蔵地数も多いと言えそうである。このことは、先史時代の大遺跡が営まれた場所は、現在のように治水技術が発達していない明治時代には、入植の格好の場所として早くから開拓が進み多くの遺跡は消滅したが、結局は都市発

生のきっかけとなっていることを示していると考えられる。

表1 主要都市の人口、面積と包蔵地数比較（平成4年現在）

	面積 (平方 km)	人口 (人)	包蔵地数
札幌市	1,121.1	1,730,156	A
函館市	346.8	301,387	A
小樽市	243.0	159,621	A
旭川市	747.4	360,262	A
室蘭市	80.5	112,443	D
釧路市	221.4	199,883	B
帯広市	618.9	169,505	A
北見市	421.1	108,971	A
苫小牧市	561.0	166,560	A
江別市	187.6	107,013	A

（ただし包蔵地数90以上をA、60～89をB、30～59をC、0～29をDとする。）

もちろん、主要都市ほど都市化が進んでいるため土地を開削する機会も多く、遺跡が発掘されやすいということもあろう。また、炭坑などのように特殊な産業に頼っている都市では、人口が急激に増加したり減少したりする特例はある。しかし、全くもって人口と包蔵地数の関係を否定することはできないだろう。

4. 包蔵地数と主要道路網との重ね合わせ

北海道の遺跡分布の特徴としては、遺跡の包蔵地数は大河川の流域や海沿いの地域に多く分布している。これは先史時代の人々は湖沼や川のほとり、あるいは川の出口のように狩猟や漁などを行いやすい場所、交通の便利な場所に生活空間をもち集落を形成していたからである。

北海道には現在48本の一般国道が張り巡らされているが本研究ではこれらの一般国道を主要道路と

定義する。

現在の北海道道路網配置図を見ると主要都市間を結びつけているのが主要道路となっている。これを表1及び図1を重ね合わせて考察すれば、包蔵地数の多い地域間を現在の主要道路が結びつけているとも言える。そこで遺跡分布図と主要道路網配置図を対比し、図1と図2で示す。

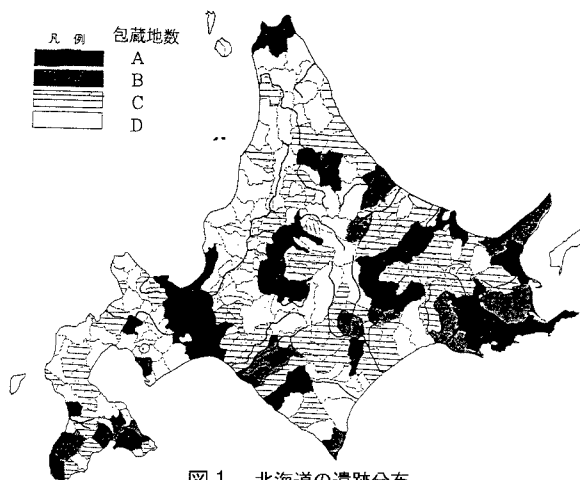


図1 北海道の遺跡分布

（北海道埋蔵文化財センター資料）

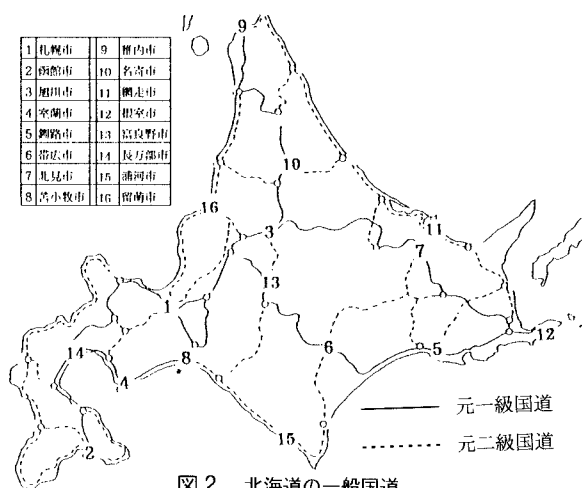


図2 北海道の一般国道

このように主要道路が走ってる地域には比較的遺跡が多く発掘されている傾向がある。もし、先史時代にも物資の運搬や狩猟の為の移動通路の確保が重要であったとするならば、形態の差こそあれ現在の主要都市を結ぶ主要道路と似たものであったと推定される。

5. 歴史的慣性の法則

5-1 歴史的慣性の法則発見の動機

大阪市の史跡難波宮跡には歴史の背景と共に様々な構造物が建てられてきた。

この難波長柄豊碕宮は、我が国において計画された最初の宮都である。そしてこの位置は、後の天武天皇の難波宮、聖武天皇難波宮と同位置である。さらに700年ほど下って、大阪石山本願寺別院が設立され2,000軒以上の市街が展開される。

しかし天正八年（1580）、織田信長による石山合戦の戦火によりこの地は一度消滅してしまうが、その3年後には豊臣秀吉により再びこの地に壮大な大阪城が築造され繁華な市街地が出現した。

慶長十九年（1614）、元和元年（1615）には大阪冬の陣、夏の陣と2回にわたる戦火によって完全に焦土と化するが、元和5年（1619）、徳川幕府はこの地が政治的、経済的枢要地であることから、直轄領とし、大阪城代を置いて支配させた。

5-2 歴史的慣性の法則の定義

千二百年余前の孝徳天皇難破豊碕宮跡の一角には、現在建設省近畿地方建設局や大阪府庁などがそびえている。すなわち大阪のこの地は、以後370余年を経過した今日もなお、我国関西第一の都市における枢要地として、政治機能を発揮していることは周知の事実である。

これはまさに、「そこに立地する施設の『構造』は変わっても『機能』は変わらない」という土木計画における歴史的慣性法則の実例である。この土地利用の傾向が保持される理由はそれぞれの地域、地区にはそれぞれの特徴があって、土地利用はその特徴を活用して為されようとするからである。

6. まとめ

本研究では、北海道の主要道路網の原点を探るために北海道埋蔵文化財センターの研究成果と主要道路網との対比から、両者の関係を指摘してみた。

また、五十嵐日出夫が提唱した「歴史的慣性の法則」を道路の発生の経緯に適用した。

その結果、都市の発生に限らず道路の発生の背景にも「構造は変わっても機能は変化していない」という慣性力が働いているように推察された。